

38. 先天性胆道閉鎖症—I cyst 型—に対する肝胆道シンチの検討

小田 淳郎 辻田祐二良 田中 正博
 真鍋 隆夫 村田佳津子 松尾 良一
 池田 裕子 (大阪市立医療セ・中放)
 中平 公士 中村 哲郎 東 孝
 (同・小児外)
 越智 宏暢 (大阪市大・核)

先天性胆道閉鎖症の基本型分類 I cyst 型は肝門部に cyst を形成し、先天性胆道拡張症と鑑別が必要である。今回本症の鑑別に肝胆道シンチを施行し、その有用性を検討したので報告する。対象は男児4名、女児2名計6名。入院時 T-Bil: 4.8~31, D-bil: 2.7~18, 肝胆道シンチの検査時期: 生後6日~46日(平均26日)。方法: ^{99m}Tc -PMT 37~55 MBq 静注後5分~24時間にてスキャン。術前のUSおよびCTは辺縁明瞭な嚢胞を呈し、サイズは1~3 cm未満のものが5例、5×6 cmのものが1例であった。5×6 cmの例は胆嚢, cyst に連続する肝内胆管様の像を認め、シンチ前は先天性胆道拡張症と診断した。肝胆道シンチでは、全例腸管は描画されなかった。また cyst 部, 総胆管, 肝内胆管, 胆嚢も描画されなかった。先天性胆道拡張症にみられる cyst 部の欠損像も全例描画されなかった。以上より、先天性胆道閉鎖症 I cyst 型においても従来の肝胆道シンチを忠実に読影すれば、より正確に先天性胆道拡張症と鑑別しうると考えられた。なお、手術時の cyst 部の内容液は全例白色透明であった。

39. 骨軟部腫瘍に対する ^{201}Tl シンチグラフィの定量的評価の検討

松井 律夫 小森 剛 土井 健司
 中田 和伸 宇都宮啓太 足立 至
 清水 雅史 末吉 公三 檜林 勇
 (大阪医大・放)
 桶田 正成 森下 忍 阿部 宗昭
 (同・整外)

骨軟部腫瘍 32 例 (悪性 12, 良性 20) を対象として、早期像, 後期像にて主に SPECT を施行し、視覚的評価および定量評価による、良悪の判定を行った。視覚的には腫瘍部に早期像で集積亢進を示し、後期

像で依然として集積亢進が確認できるものを悪性とし、それ以外のものを良性とした。定量的には腫瘍部の対側健常組織部の集積比 {early ratio (ER), delayed ratio (DR)}, 腫瘍部の早期像と後期像での集積比 (Td/Te), 同じく健常部位での集積比 (Nd/Ne) を求めた。視覚的評価では悪性腫瘍 12 例とも異常集積を認め、良性腫瘍 20 例中 9 例は異常集積を示さず, accuracy = 91%, sensitivity = 92%, specificity = 90% であった。異常集積を示したものの 23 例を対象として定量評価を行った。定量評価では悪性および良性の ER はそれぞれ 5.9 ± 4.1 , 2.4 ± 2.2 で有意に悪性が高く, DR は有意差を認めなかった。ER で 2.7 を cut off 値とすれば accuracy = 83% が得られた。ER 値は視覚的評価を補う有用な指標と考えられた。Td/Te は悪性で 0.77 ± 0.11 , 良性で 0.95 ± 0.21 で良性のほうが高かった。Nd/Ne は悪性で 1.65 ± 0.5 , 良性で 1.45 ± 0.46 で共に 1 より高く, 筋肉を含む健常組織は明らかに後期像にて早期像より強い集積を示していた。Td/Te で悪性より高かったのは良性腫瘍がより正常組織に近い性状を示しているからと考えられた。

40. 両側乳腺腫瘍 3 例の ^{99m}Tc -MIBI 乳腺シンチグラフィ

太田 仁八 (大阪赤十字病院・検査部)

はじめに: ^{99m}Tc -MIBI による乳腺シンチグラフィは、乳腺腫瘍の補助診断として有用であることが報告されている。また乳腺腫瘍が多発あるいは両側性に発生することは稀ではない。3例の手術により確定診断された両側乳腺腫瘍に乳腺シンチグラフィを行ったので報告した。

症例報告: 61 歳, 左に 1.5 cm, 3 cm の 2 個, 右に 1.5 cm の腫瘍を認め、超音波診断 (US) では癌であった。右腫瘍の細胞診 (ABC) は陰性であった。シンチグラフィでは早期像 (静注 15 分), 後期像 (3 時間) ともに 3 個の腫瘍に集積を認め、左腋窩にも集積を認めた。いずれの腫瘍も乳癌で、左腋窩リンパ節に転移を認めた。

49 歳, 左に 4 cm, 右に 2 cm の腫瘍を認め、US では両側乳癌であった。ABC で左は疑陽性, 右は陰性であった。シンチグラフィでは左にのみ集積を認め、手術結果は左が乳癌, 右が線維腺腫であった。